

F/T09

フェスティバル/トーキョー

PRESS RELEASE

『フォト・ロマンス』

演出：ラビア・ムルエ、リナ・サーネー
【レバノン】

11月26日(木)～29日(日)

於：東京芸術劇場小ホール1



『これがぜんぶエイプリルフールだったなら、とナンシーは』© Kohei Matsushima

2006年のレバノン空爆直後。大規模デモの日。
元左翼主義者と、家庭の悩みに溺れる主婦の人生が交錯する日。

お問合せ： フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 <http://festival-tokyo.jp/>
〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨 4-9-1 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン内
TEL 03-5961-5202/FAX 03-5961-5207 toiawase@anj.or.jp
制作担当： ハッセル、タラ・石塚 t-hassel@anj.or.jp

／ 作品について

レバノンの鬼才、アヴィニョン初演の最新作で再来日

レバノン出身の鬼才アーティスト、ラビア・ムルエとリナ・サーネー。中東・レバノンの複雑な政治・社会状況を反映した彼らの作品は、東京国際芸術祭 2004 での『BIOKHRAPHIAービオハラフィア』、同じく 2007 年『これがぜんぶエイプリルフールだったなら、とナンシーは』、SPAC 春の芸術祭 2008 での『消された官僚を探して』など、立て続けに日本でも紹介され、好評を博してきた。

今回フェスティバル/トーキョーで上演されるのは、去る 2009 年 7 月にアヴィニョン演劇祭で世界初演され、大絶賛を浴びている最新作『フォト・ロマンス』。フェスティバル/トーキョーも国際共同製作に参加して製作された本作品は、これまでの作品にも増して、虚構と現実の間での演劇的戯れに満ちつつも、レバノン社会における検閲や共同体の問題に鋭いメスを入れる批評的パフォーマンスとして、日本上演への期待が高まる。

「歴史＝物語」が交錯する、ベイルートの「特別な一日」

2006 年、イスラエル軍による空爆直後のレバノン。激しく対立する 2 勢力に分かれた大規模デモの当日。皆がデモに参加するため出払ってしまい、空っぽに静まり返ったベイルート近郊のとある小道。そこで、悩み多き主婦リナと、元左翼活動家ラビアの人生が交錯する。

このストーリーは、イタリア映画史に残る名作、エットーレ・スコラ監督の『特別な一日』（出演：ソフィア・ローレン、マルチェロ・マストロヤニほか）から借用されたものだ。ただ、舞台はヒトラーが第二次大戦勃発直前にローマを訪れた日から 2006 年のレバノンに置き換えられている。原作と同様に、出発点は孤独を抱える 2 人の人生が、突如交錯することである。ただ、『フォト・ロマンス』の登場人物は、社会・政治的の現実に応用し難い元極左翼の活動家、そして家庭・社会・宗教的な悩み事に溺れる主婦である。彼らは極原理主義と極資本主義の間で葛藤するレバノンにいる。この作品でもサーネーとムルエは、これまで同様、演劇における表現と遊戯の関係性、芸術における虚構と現実の関係性を鋭く問いかける。ただし今回は、地元レバノンのドキュメンタリーに着想を得るのではなく、想像上の登場人物と写実的演技で、レバノンの複雑な現実と演劇そのものを「物語」の中に描いていく。

『フォト・ロマンス』は二つのパラレルのストーリーを持っている。一つのストーリーはムルエとサーネーが演じる『特別な一日』。それはロマン・フォト（写真でストーリーの展開を表す）という形式で舞台後方のスクリーンに投映されている。もうひとつのストーリーは舞台上にいるアーティストのサーネーが検閲委員会の代表、検閲官のムルエに自分のプレゼンテーションをするというシナリオ。『フォト・ロマンス』は母国で検閲を生きるムルエとサーネーの鋭いアイロニーが込められた、二重のメタ演劇作品と言えよう。

／ 劇評より（2009年アヴィニヨン公演）

『フォト・ロマンス』:

ムルエとサーネーは、二つの物語を重ね合わせたり響かせたりする戯れによって、レバノン社会では（検閲によって）表現できない言葉や思想をいたずらっぽく織り込ませている。

（ラ・テラス紙）

鋭く痛快なムルエとサーネーの新作では、演劇における現実と虚構の境界線に意味を与える。

（ル・モンド紙、2009年7月12日）

教訓的な面はなく、見事な芸術的自由さ。素晴らしくも絶望的なユーモアに隠されている、重大な現実。

（テレラマ、2009年7月10日）

器用さと茶目っ気を兼ね備えた二人のアーティスト＝パフォーマーは、辛辣かつ愉快的な、独特の舞台を編み出す。そこでは、演劇パフォーマンスと、写真小説のように次々と写真でつづられる映画が混合する。頭のいい作品だ。

（ラ・プロヴァンス、2009年7月9日）

／ アーティスト・プロフィール



ラビア・ムルエ Rabih Mroué

劇作家・演出家・俳優

1967年ベイルート生まれ。現在世界の演劇界、アート界で最も高い注目を集める気鋭のアーティストの一人。ベイルートのレバノン大学で演劇学を専攻し、90年より劇作家・演出家・俳優としてのキャリアをスタート。やがて内戦の終わったレバノン社会の傷と矛盾を執拗に表象し、解体するパフォーマンスや映像作品をつくりはじめる。

代表作『スリー・ポスター』(01年)、『BIOKHRAPHIAービオハラフィア』(02年)、『消された官僚を探して』(04年)、『表象を恐れるのは誰?』(05年)は、ヨーロッパの主要な劇場やフェスティバルのみならず、中東、北米、アジアの各地でも上演され、世界の演劇フェスティバルや劇場の常連としての地位を築いてきた。日本でも『BIOKHRAPHIAービオハラフィア』が04年東京国際芸術祭で、『消えた官僚を探して』が08年SPAC春の芸術祭に招聘されている。また、前作『これがぜんぶエイプリルフールだったなら、とナンシーは』(07年)は、東京国際芸術祭との共同製作により東京にて世界初演され、その後、世界中で大きな反響を巻き起こした。

ラビア・ムルエの作り出す作品は、メディアや共同体が語る真実と虚構の間のあいまいな境界に揺さぶりをかける。個人のプライベートから、演劇やアートの意味や役割、そして宗派や政治派閥によって定義されるレバノン社会の諸問題まで、彼は自身が集めるドキュメント(記録物)、写真、オブジェなどを通して、「真実」を探し求めるが、その行為によって逆説的に明らかになってくるのは、メディアや歴史が作り出した多くの虚構に過ぎない。アーティストは個と社会の「歴史＝物語」を交錯させながら、その影に潜む虚構の構造を暴いていく。

一方、俳優としてのムルエの活躍も目覚ましい。2008年には、『私は見たい』(監督:ジョアンナ・ハジトウマ&カリル・ジョレイジュ)でカトリーヌ・ドヌーヴと共演。ムルエが、ドヌーヴをレバノン南部にある祖母の家に連れていくという設定で、長年の内戦やイスラエル軍による攻撃で荒廃したレバノンの現実が映し出される。本作品は2008年カンヌ映画祭「ある視点」部門にもノミネートされ、日本でも東京フィルムフェックスのコンペティション部門で上映され、大きな話題を呼んだ。

リナ・サーネー Lina Saneh

演出家・俳優

1966年ベイルート生まれ。『椅子』(96年)、『Ovriらーオブリラ』(97年)、『戸籍の抜粋』(00年)、『BIOKHRAPHIAービオハラフィア』(02年)などの代表作では、演出のみならずサーネー自身も出演している。

初期の作品群では、中東の政治社会的紛争に影響を受けた身体と、そこに刻み込まれた痕跡を描いている。現在は体の理想化が進んでいる一方、この仮想世界における舞台芸術の持つ役割についてを出発点として、我々の市民の権利や公共の立場を疑問にする、マルチメディア・アートや映像、新しいシュプレヒコールを呼び起こせる力がある、様々な手法を借用した作品を創造している。

代表作の『アッペンディス』(07年)は内臓を一個一個取り外して、擬似的に火葬するという作品である。これは「リナ・サーネーボディ・パーツ・スタジオ」というプロジェクトの一貫で、宗教的制限により火葬を禁じ法律のあり方を問。人体に署名して、作品化したアーティストピエロ・マンゾーニにインスピレーションを得たサーネーは国内外のさまざまなアーティストに自分の体の部分部分に署名してもらい、死後には体を解体し、世界中にいるオーナーに分けるという長年のアート・プロジェクトも行っている。サーネーにとって、これはレバノンの抑圧的体制からの脱出方法である。

／ キャスト/スタッフ

構成・演出	ラビア・ムルエ、リナ・サーネー Rabih Mroué、Lina Saneh
動画	ラビア・ムルエ、リナ・サーネー、サルマド・ルイス Rabih Mroué、Lina Saneh、 Sarmad Louis
舞台美術	サマル・マーカルーン Samar Maakaroun
音楽	シャーベル・ハベール Charbel Haber
フォト・ディレクション	サルマド・ルイス Sarmad Louis
衣装	ゼイナ・ザーブ・ド・メレロ Zeina Saab de Melero
アシスタント	ペトラ・ゼルハル Petra Serhal
出演	ラビア・ムルエ、シャーベル・ハベール、リナ・サーネー Rabih Mroué、 Charbel Haber、Lina Saneh
製作	アシュカル・アルワン・レバノン現代芸術協会
共同製作	アヴィニヨン演劇祭、エヴリーアゴラ国立舞台、コリヌ演劇祭(トリノ)、 フェスティバル/トーキョー、ラ・ヴィレット公園、HAU 劇場ベルリン

東京公演スタッフ

技術監督	寅川英司+鴉屋 Eiji Torakawa + Karasuya
舞台監督	佐藤恵 Megumi Sato
大道具	大津英輔+鴉屋 Eisuke Otsu + Karasuya
小道具	栗山佳代子 Kayoko Kuriyama
照明コーディネーター	佐々木真喜子 (株)ファクター Makiko Sasaki (Factor)
音響コーディネーター	相川晶 (サウンドウイーズ) Akira Aikawa (Sound Weeds)

後援	レバノン大使館 Embassy of the Republic of Lebanon
共催	東京芸術劇場(財団法人東京都歴史文化財団) Tokyo Metropolitan Art Space (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)
主催	フェスティバル/トーキョー Festival/Tokyo

/ 公演情報

会場 東京芸術劇場小ホール1
(東京都豊島区西池袋 1-8-1 TEL. 03-5391-2111(代))

公演スケジュール

11/26 (木)	11/27 (金)	11/28 (土)	11/29 (日)
19:00	19:00 ★	14:00 19:00	14:00

★ 終演後ポスト・パフォーマンストークあり

上演時間: 80分
初演: 09年
上演言語: アラビア語・日本語字幕付き

/ チケット情報

料金 自由席(整理番号付き)
一般 4,500円
学生 3,000円/高校生以下 1,000円(要学生証提示)

前売開始 2009年9月5日(土)

お取扱い ○F/Tチケットセンター 03-5961-5209(12:00-19:00)
※前売開始日9/5(土)のみ10:00より受付
○F/Tオンラインチケット(要事前登録・無料)
<http://festival-tokyo.jp/>(パソコン)
<http://festival-tokyo.jp/m/>(携帯) ※モバイルサイトは9月より開設予定
○F/Tステーション(東京芸術劇場前)
※10月後半より取扱い予定
○電子チケットぴあ 0570-02-9999
(Pコード予約:397-084) <http://pia.jp/t/>
○イープラス <http://eplus.jp/ft09/> (パソコン・携帯)

* 回数券、セット券、ペア券など、F/T チケット情報詳細につきましては、F/T 全体チラシまたは F/T 全体リリース、HPをご参照ください。

/ 写真/クレジット一覧

『これがぜんぶエイプリルフールだったなら、とナンシーは』(2007年) ©松島浩平 Kohei Matsushima



ポートレート: ラビア・ムルエ & リナ・サーネー (クレジット不要)



- ・ ご利用になる場合は、写真家のクレジットを必ず併記してください。
- ・ 原則、トリミングおよび加工は不可。